



伊波小通信7



発行:石嶺 聡 NO, 7 平成29年10月4日(水)



読書旬間(10/2~10/20)迎えるにあたって
「マザー・テレサ 愛の花束」を読んで一考察



日本のような先進国では、「いじめ」「不登校」「引きこもり」「家庭内暴力」「非行」「殺傷事件」「自殺」などの問題が深刻化し、一つの屋根の下に住みながら、家族の心はバラバラになってしまった事例が実際に起きています。このような問題を解決するには大変なことです。校長先生は、マザー・テレサが日本に来た時のあるスピーチや考え方が解決する糸口になるんじゃないかと思ひみなさんに紹介します。

彼女は、現代の家族が危機的状況にあるのを知っていました。本来、家庭はあたたかく人を包みこむものです。外に行って疲れて帰ってきて、ふと安らぎを感じ「やはり、我が家が一番いいな」と思うものです。そこには、自分が愛し自分を愛してくれる人がいるからです。マザー・テレサはそのような家庭で少女時代を過ごしました。修道女になってからは、修道会が彼女のあたたかな家庭でした。家庭での愛は、互いに互いの幸福を願うことから始まります。そのために、マザー・テレサは、口癖のようにいいます。「私たちは、身近な小さなことを家庭から誠実に、そして親切に、ひとつひとつ積み上げていけばいいのです」「わたしにもできるのですから、あなたなら必ずできます」とお話しています。

マザー・テレサのスピーチや考え方から、校長先生は、「特に、家庭や家族から思いやりのある生活をしてみてはどうでしょうか」と強く思うようになりました。校長先生にとって、マザー・テレサという存在は、とても遠い人の印象がありましたが、彼女のことを知れば知るほど、今では本当に身近な人を感じるようになりました。なぜならば、小さいいいことをコツコツと頑張っていけばいいのだから。もし、彼女がそばにいたら、「マザー・テレサさん、ありがとう。感謝の気持ちでいっぱいです。」と申し上げたいです。みなさん、いい世の中、いい社会を築いて行きましょう。お願いします。



マザー・テレサの名言

マザー・テレサが残した言葉に「もしも月の世界に貧しい人がいるのなら、私たちは月へも行きます。」と言っています。

